

拝啓

黒南風が吹き渡り、涼雨が川内の中善並木を静かに濡らす季節がやってきました。一ステ合奏に参加される皆様におかれましては、日々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

E-learning の五月分タスクの終了と共に、私の五月はこれという実感のないまま過ぎてしまいました。光陰矢のごとし、とはよく言ったもので、新歓で〇五の皆さんとお会いしたのが、まるで昨日のことにようにありありと思い起こされます。

しかし夏は日々確実に迫っているもので、雨の晴れ間に照りつける日差しは強く、コンクールに向けて合奏ごとに苛烈さを増すイノウエ氏の指導を感じさせるものがあります。されどそれは同時に、稲を育て、果実を実らせる恵みの日差しでもあります。よく陽光を浴びて育ったトマトが、目を睨るべき甘さと旨味をその味に宿らせるのと同様、彼の指導によって私たちの音楽は勢いを増し、五月雨を集めて疾し最上川のように目眩く大河となって、目指すべき大海、あるいは大会へと流れていくのかもしれない。知らんけど。

さて、六月一日に行われました一ステ合奏、そのレトロの部分の部日誌を以下に記述させていただきます。私自身の解釈が混じっていますが、平にご容赦ください。

【曲全体に関すること】

・全体的に裏拍を合わせるのが苦手。八分休符と八分音符が連続する部分は表拍を意識して

【A前】

・全体について、二↓三小節までフレーズが続いているので、B♭7の和音を生かしてキレイ過ぎないように

・全体について、三小節目の和音をしっかり鳴らしたい。

・全体について、三↓四小節の和音の進行感を意識したい (C♭9/B♭9→B♭9)

【A】

・全体について、Aに入った瞬間のB♭の和音の響きが残るようにしたい

・全体について、四小節目三・四拍目は音程が見え、かつ楽譜通りの音型で

【B】

・一小節目一拍目八分音符二個について、和音をはっきり鳴らしたい。Tubは力九割程度で

・全体について、C一小節前の八分音符四つが走るので気をつけたい。音型はテヌートで

【C】

・ある人について、30小節目最後の八分音符はスタッカートではなく「ダ」の発音で切る

【D】

・F1、四拍目から次の拍頭のつながりを見せたい

【E・F】

【G】

・全体について、G最初から六十一小節目の三拍目までのフレーズとして処理

【H】

- ・E 低音 何？（合奏中のメモをそのまま写しています。ご了承ください）
- ・Trp と Trb について、六十八小節目は四分と付点四分の区別をはっきりと
- ・六十四小節目と七十四小節目の違い  
（表拍のあるなし、八分休符のあるなし）意識したい

【I】

- ・メロディー奏者について、  
二小節目ははっきり切って低音を聴かせたい  
二フレージズムもスラーの切れ目をちゃんと切る
- ・ビブラフォンについて、ビブラフォンらしい音を聴かせたい

【M】

- ・全体について、百十二・百十三小節はクレッシェンドしつかり、頂点に向かう音の持続を  
百十三小節目の伸ばしは拍感を失わないように

【N】

- ・全体について（違うかも）二小節目の切りを合わせる
- ・Trp・Trb について、三小節目の食いつきをよく
- ・Sax について、向きはホール練で確認
- ・Trp・Trb について、百二十一→百二十二の音は長さを見せる

【O】

- ・Trp・Trb について、拍裏から入る音を合わせたい

末尾に、合奏中に思った個人的な意見を一つだけ書かせていただきます。

それは○五の皆さんは本当に楽器がうまいなあ、ということです。某二六（！）トレーナーの方はこれを皮肉として用いたようですが、私は本心から感動しました。去年のサマコン一ステの出演者として言わせていただきますが、昨年に比べて一人一人のレベルは確実に高いのは間違い無いと思います。だからこそ、もっと○四を押し退けて、はっきりと自己主張をしてみてくださいと思います。イノウエが Stack の長文の中で（読んでいない方もいらっしやると思いますが）言及しているように、現在の合奏には自発的な楽想の発露が求められている……ような気がします。指揮者に定められるフレージングさえも、必ずしも守るべきものではないと思います。（もちろん合理的な理由がないものは論外ですし、従った方がいいものも多々あります）

末筆ながら、皆様の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

令和五年六月四日

保科悠太

一ステ出演者各位